

金賞

作品タイトル：春を下る

選択画像：C

五月の堀川を、船は滑るように進んでいた。

——なんか、名古屋じゃないみたい。

見慣れているはずのビル群を仰ぎ、私は感心する。船に乗るだけで、こんなに景色が変わるとは知らなかった。

「それで、『堀川を掘れ』と命じられたんですか？」

「そう、家康様にな。責任重大だろう？」

後ろの席から聞こえてくるのは、夫と年配の男性の声だ。甲冑姿のその男性は、堀川の歴史について説明しているらしかった。歴史好きの夫が合いの手を入れるせいか、だんだん声が大きくなっている。

「五条橋です」

船頭の男性が明るく言った。五条橋をくぐると、残りは半分強だ。前の席の若い女性たちが、「あつという間だね」と顔を見合わせる。

「材木や石を運ぶには、船が最適ですよ」

「ああ。堀川ができてからは、米や味噌なんかも船で運ぶようになったが」

夫と甲冑の男性は、まだ歴史談義に花を咲かせていた。船上の眺めなど眼中にないようだ。

やがて前方にまた橋が見えてきた。終点の納屋橋乗船場だ。

「ほら、あそこじゃ」

「……っ！」

不意に顔の横に腕が突き出てきて、私は危うく叫びそうになった。見れば、甲冑の男性が橋の欄干を指さしている。

欄干には、丸に十字をデザインしたレリーフがあった。もしかして家紋だろうか。

「あれは……」

私は眩き、後ろを振り向いた。しかし、そこに甲冑の男性の姿はない。代わりに夫が意味ありげな笑みを向けてきた。

——やっぱり。

正直、驚きよりも納得のほうが強かった。武将隊同乗の便はあるが、それを選んだ覚えはないからだ。話の内容から察するに、甲冑の男性は堀川を作った武将なのだろう。

——確か、福島正則だっけ？

目顔で夫に問うと、彼は笑みを深めた。そのまま薄れるように、船上から姿を消す。思いがけず武将と話すことができ、満足だったに違いない。

川べりの街路樹は青々と葉を繁らせている。

夫の好きだった春が、今年も終わろうとしていた。

銀賞

作品タイトル：魔法のジュラシックライダー

選択画像：A

夕飯の後に家を抜け出して、僕は夜の大高緑地にやってきた。昼は親子連れで賑わっていた公園も、今は静けさに支配されている。

足音が響かないよう慎重に、滑り台の階段を上る。ハリボテの恐竜の腹に空いた穴をくぐり、僕は踊り場に腰かけた。夜空には丸い月が輝いている。

昼間はダメだった。何度念じながら滑っても、僕は公園の地面に着地した。そりゃそうだ。魔法は夜に起こるものって相場は決まってる。

魔法の発動には鍵も必要だ。ポケットから取り出した石を月の光にかざす。滑らかな黄色の中に、小さな黒い影が見える。お父さんが科学館で買ってくれた、虫入りの琥珀。太古の記憶を閉じ込めたこの石があれば、今度はうまく行くはず。

琥珀を握りしめ、僕はまぶたを閉じる。大高緑地には動かぬ恐竜達が棲んでいる。でも僕は、動く彼らに会いたい。お願い、僕を君たちの時代に運んで。祈りを込めて滑り面へと体重を移動させ、「うわっ」

目を瞑っていたせいでバランスを崩し、僕は仰向けにひっくり返った。

その瞬間、僕の背に伝わってきたのは、大地を揺るがすような振動。反射的に伸ばした手が見つかったのは手すりではなく、ゴツゴツとした鱗。

滑り台じゃない！ 本物の恐竜だ！

月に見降ろされながら、僕を乗せた恐竜はゆっくりと進む。左右に揺れる巨体から振り落とされないように、必死に硬い鱗をつかんだ。夏の名古屋よりも蒸し暑い空気が僕を包む。

「や……やった！」

興奮のあまり思わず声が出た。恐竜が低く唸り、頭を持ち上げる。しまったと思う暇もなく、背中が垂直になり、僕の体はずり落ちる。背から尾へ、そして地面へ。

気づけば僕は、滑り台の降り口に寝転がっていた。足に触れるのは柔らかな芝生。僕を乗せていた恐竜は、ハリボテに戻ってしまった。

「……夢、だったのかな」

足元に落ちていた琥珀を拾い、月にかざす。溶けて消えたように、石の中の虫がいなくなっていた。

銀賞

作品タイトル：アユたちの居場所

選択画像：C

「おばあちゃん、お店やめるの？」

探していた姪は、堀川沿いの小道に座っていた。店に置いてあった古いお手玉を手をしている。年期の入った小豆入りの袋が、一つ二つと宙に舞う。

「腰が悪いんだ。無理させられないよ」

四〇年続けたお好み焼き屋を年末で閉めると聞いたとき、改めて母の年齢を思い出した。仕事を辞めて名古屋に戻った俺の目に、母は一回り痩せて見えた。

「学校が終わったらどこに行けばいいのかな」

姪の声が震える。店から姿を消したのはそれが原因か。

兄の子であるこの姪は、共働きの両親に不満も言わず、毎日、母の店で過ごしている。油ジミのついた机で勉強する姿を、帰省のたびに俺も見ていた。

「あの店が気に入っていたか」

姪が落としたお手玉を拾い、砂利を払って渡してやる。補修された、つぎはぎの生地に見覚えがあった。

記憶の中の自分が、母にひっぱたかれた。

小学生の自分が抱えていたお手玉が石畳に落ち、空き缶が手からこぼれて転がっていく。――汚れているからといって、汚してはいかんよ。

堀川に投げ捨てようとした空き缶を拾い上げた、母の諭すようなつぶやき。あの夏匂っていたへドロ臭が、今は消えていた。「なあ」

「堀川に、魚の鮎が来るって本当か？」

「大人が言ってた。この辺来るのはまだ赤ちゃんで、見てもわかんないらしい」

錆びた川縁のフェンスに手をかけ、堀川を覗く。

底は濁って見えない。

でも鮎が帰ってくる場所になった。母は正しかった。

「店は俺が続ける」

そのために仕事を辞めて戻ってきた。振り返ると姪が顔を上げていた。

「おばあちゃんも手伝ってくれる。アユ、帰るぞ。お好み焼き、食べるだろ？」

母から俺そして姪へ、居場所が渡る。つながりが輪になっていく。

姪が隣に立ち「アユの場所、なんでわかったの？」と問う。

「おじさんも昔、ここでお手玉をしたんだ」

姪から借りてお手玉を回す。ひとつ、ふたつ、みっつ。

循環が永遠に続く輪となって、宙に生まれていた。

佳作

作品タイトル：家常茶飯

選択画像：A

寄り添う高木の青葉の香りも拾いつつ、薫風が朝の恐竜広場を吹き抜けた。
樹下のベンチに腰掛ける老婆が、傍らの樹木の方を向き問いかける。

「あれは何と言ったかな、あのすべり台の怪獣は」

「あれは怪獣でなくて恐竜だわ」老声が答える。

「ナントカドラゴンでなかったかな」

「いやあ、ナントカザウルスだわ」

視線の先には、二頭のティラノサウルス『大（だい）ちゃん』と『高（こう）ちゃん』が子どもたちを楽しませていた。

大きい方の『大ちゃん』には、お腹の階段を上ると「グワオー」と鳴き声が聞こえる仕掛けがある。

しばらくの沈黙を破ったのは老婆だった。

「最近あれだなあ、きかない（黄色い）新幹線は無くなったんかね、孫が言っとったけど」

「いやあ、まだ二年くらいは引退せんらしいで、ナントカドクターだろう？」

「そうだなあ、この前走っとったもんなあ、そうそう、ドクターナントカナ」

老婆が東海道新幹線の線路方向に顔を向けたのが合図であったかのように、N700Sが名古屋方面へ駆け抜けた。

ドクターイエロー（T5編成）の引退はまだ少し先である。

「去年アレだわ、動物園にアレが来たもんで、孫が友だち何人か連れて盆過ぎに帰って来たわ、ナントカドラゴンな」老婆が嬉しそうに話し出す。

「ああ、アレだろう、ドラゴンな」

目の前では恐竜の尻尾から、流し素麺のように子どもたちがきゃあきゃあと、流れて来る。

「子どものドラゴンな」

「そうそう子どもドラゴンな」

子どもたちの歓声が恐竜を吹き抜け、新幹線も交互に通り過ぎて行った。

「じゃあ、ワシはそろそろご無礼するわ、モーニング行かなかん」

そう言うと、幹に隠れるほどスマートな、ヘルメット姿の老人が、傍に停めていた自転車にヨイショと跨った。

老婆も腰を上げる。

「ワシも、今日は名駅行かなかんわ」

「またな」と、同じくらいのペースで分かれて行く散歩友だちの二人に、遠くで『大ちゃん』も「グワオー」と挨拶をした。

佳作

作品タイトル：さなちゃんの大発見

選択画像：A

さなちゃんはじーちゃんとおさんぽがだいすきです。じーちゃんはなんでもしています。空の雲、草むらの中の虫、池にいる鳥。さなちゃんの「あれなに！」にぜんぶこたえられるのはじーちゃんだけです。

でも、ちかごろきになることがさなちゃんにはあります。ちかくの公園の、恐竜のすべり台のことです。

「ほれ、今日はオオダカオスベリザウルスのとこいくぞ」

さなちゃんはさいきん、恐竜の図鑑をよんだのですが、そこに「オオダカオスベリザウルス」がのっていませんでした。

「オオダカオスベリザウルスはきょうりゅうじゃないとおもう」

「ほうか。なんでそう思った？」

「ずかんにいないから！」

ははは、とじーちゃんはわらいました。「この世は図鑑に載ってないことだらけだぞ」

テクテク歩きながらさなちゃんはなやみました。ずかんにのってないことは、どうやって知ればいいのか。

かんがえているうちに、公園につきました。

「図鑑にないことは、自分で調べなかん」

そういって、じーちゃんはちいさな手帳とえんぴつをさなちゃんにわたしました。

「よく見て、触って、考えてみい。そしたらこいつのことも分かる。分かったらそれを書く。ええか？」

さなちゃんは「わかった！」とへんじしました。

オオダカオスベリザウルス

おおきさ・にかいだてのいえくらい

いろ・かれくさいろとちゃいろ

てざわり・ざらざら、ぶつぶつ

におい・おいしいのにおい

きづいたこと・てのゆびがにほん

さなちゃんはきづきました。

「じーちゃん、これ、ちがう！ きょうりゅうのゆびはご、か、さん！」

じーちゃんは「よお気づいた」とさなちゃんのあたまをなでてくれました。

さなちゃんは「おまえはきょうりゅうににてるけど、ちがうから……オオダカオスベリザウルスモドキだ！」と指をピツとのぼしてさげびました。

「大発見だがね！」

じーちゃんのたかわらいがあおい空にむかってのびてゆきました。